

話法の伝達動詞と引用部の関係

ー語用論的アプローチー

岡本 芳和

0. はじめに

話法とは人が言った事や考えた事を伝える方法であり、英語では主に直接話法(Direct Reported Speech)と間接話法(Indirect Reported Speech)とがある¹。そして、話法の引用部の中で伝達される内容は、伝達部で使われる伝達動詞と深く関係している(内田 1979, Uchida 1980, 高原 1983, 井上 1986)。本稿では、言語行為と視点の観点から話法の分析を試み、そして、引用符の中で示された発話を直接話法で伝える時、伝達部で使用される伝達動詞がどのように選択されていくのかという点を検討していきたい。

基本的に伝達動詞は say, tell, ask などが選択されるが、このほか beg, suggest, order, explain などいわゆる発語内の力を表すもの (Alston (2000), Searle (1969, 1977, 1979), Vanderveken (1990)) も使用される。

(1) a. "Let's play outside," Mr. Smith said.

b. "Let's play outside," Mr. Smith suggested

(2) a. "It will snow soon," Mr. Smith said.

b. "It will snow soon," Mr. Smith warned (suggested, advised, etc.).

(1)や(2)のそれぞれのペアにおいて、伝達動詞 say だけでなく、いろいろな伝達動詞が選択されている。引用部が表わす伝達内容の意味は、(1)では提案を表わし、(2)では考慮されている状況により、警告や提案そして忠告を表わしている。これは引用部のなかで示される伝達内容を報告者がくみとって伝達動詞を選択して描写している。このように伝達動詞に基本型の say 以外の伝達動詞が用いられるのは、話法の構造にその原因があると考えられる。そこで次のような仮説を立ててみたい。

(3) 《仮説》

直接話法では、間接話法とは異なって、視点が報告者と話し手の両方にある。直接話法の引用部は話し手の視点で、伝達部は報告者の視点でそれぞれ描写しており、伝達部は、

報告者の視点から構成されている。

この仮説を論証するために、話法の特徴を紹介し、直接話法と間接話法の違いを見ていきたい。

1. 話法の特徴

話法の特徴を述べる前に、本稿では、この話法の中で報告される発話を言語行為としてとらえるものとみなす。なぜならば、話し手が聞き手にメッセージを伝えるという話法の特徴を、語用論的観点から考えるならば、話し手から聞き手に対して何らかの言語行為が遂行されていると考えることができるからである。それゆえに、本稿で扱う話法もこの言語行為の一つとしてとらえて分析する。さらに、話法については、いろいろな議論がされてきたが、「視点」という概念から分析したものはほとんどみられない²。そこで直接話法と間接話法の違いを「視点」という概念から検討してみたい。その前に、それぞれの話法の定義をしておく。

1.1. 話法の種類と定義

本稿で扱う直接話法と間接話法について比較するために、以下のようにこの2つを明確に定義してみたい³。

(4) 話法の種類と定義

【直接話法】

伝達部と引用部からなり、報告者 (=reporter) が、話し手から聞き手の発話をそのままの形で、引用符を使って表現したもの⁴。

【間接話法】

報告者が、もとの発話の意味内容をくみ取り表現したもの。つまり、もとの発話は、報告者の判断によって解釈されるため、もとの発話が正確に伝えられているとは限らない。

1.2. 話法の視点

ある発話を報告する時に、誰の視点で報告されているのかが重要になる。そこで、両話法の視点について考える。澤田(1993: 303)では、つぎのように視点⁵を定義している。

(5)「視点」とは、言語行為において、話し手（あるいは書き手）があるできごとを描

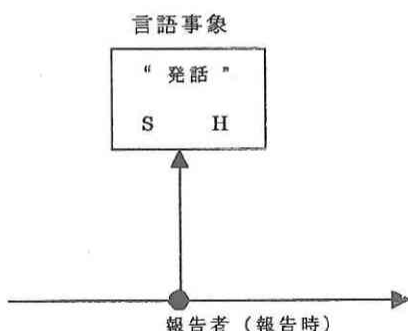
写しようとする時に話し手（あるいは書き手）自身がしめている空間的 (spatial), 時間的 (temporal), 心理的 (psychological) な位置といった意味である。

澤田(1993: 303)

続いて、話法の視点と話法の分析に必要とされる用語について説明する。話法においては、澤田(1993: 303)で定義された「話し手（書き手）」は、それを「報告者」と定義し、統一して用いることにする。「話し手（＝原話者、オリジナルスピーカー）」という用語は、直接話法における登場人物の話し手だけに使われる。そこで視点とそれぞれの話法の関係は、次のような図を用いて説明することができる。横の矢印で示される直線軸は時間軸である。

(6) 話法の視点と用語の定義

I 直接話法



II 間接話法

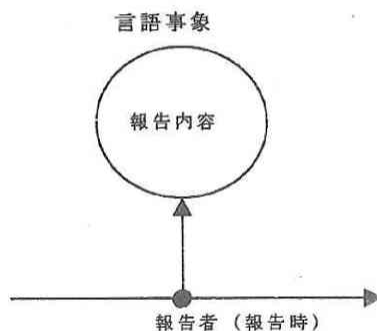


図 1

時間軸上に報告者が言語事象をとらえる描写点(Point of Description)がある⁶。それぞれの話法では、報告者のとらえ方が異なっているのがわかる。直接話法では、登場人物 S (話し手) と H (聞き手) を想定する。ここで視点は、引用符でくくられた話をしている話し手にあり、その状態を報告者がスピーカーのような役割をして報告しており、その状態を描写している報告者にも視点があると考える。一方、間接話法では、報告者が報告者の視点から事象をとらえて報告しており、ここでは、報告者の判断によってその事象が描写されていると考える。

このように、それぞれの話法では、視点の違いがはっきりとあらわれ、この違いは、表現形式の描写の仕方に大きな影響を与えている。以下の例は、一般的な話法の転換の中で示されるペアであるが、これらを見てもそれが明らかである。

- (7) a. John said to Ann, "Why have you done that?"
 b. John asked Ann why she had done that.
- (8) a. Tom said, "I shall go to the library tomorrow."
 b. Tom said that he would go to the library the following day.

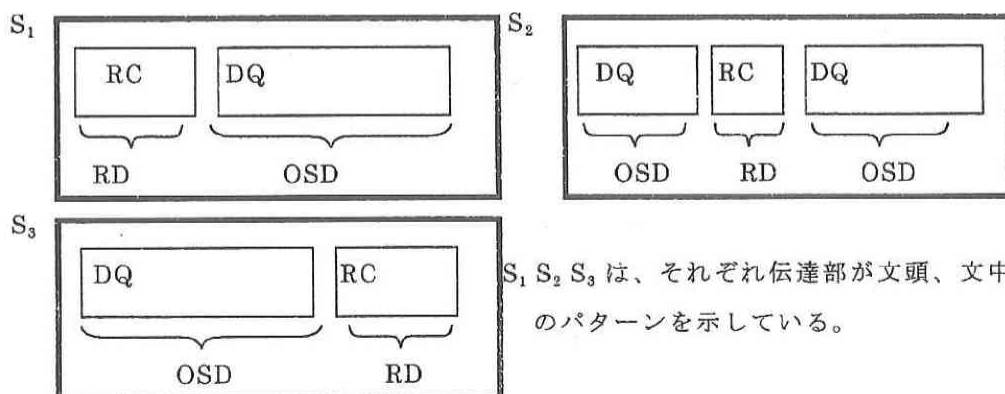
1.3. 話法の構造

これまで、それぞれの話法について視点の違いについて述べてきた。ここでは、伝達部と引用部について報告者と話し手の 2 つの視点から起こる話法の構造について考えてみたい。伝達部と引用部の 2 つの関係において、本稿では新たに「領域(domain)」という概念を提唱する。この領域を設定することによって、話法の構造をより明らかに示すことができるからである。これらは報告者と話し手によって形成され、それぞれを報告者領域(Reporter's Domain)と話し手領域(Original Speaker's Domain)と呼ぶことにする。以下のように、「領域」に基づいて両話法の構造を考える。

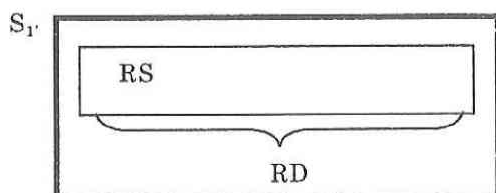
(S は文(=Sentence), RC は伝達部(=Reporting Clause), DQ は引用部(=Direct Quote), RD は報告者領域(=Reporter's Domain), OSD は話し手領域(=Original Speaker's Domain), RS は、報告文(=Reported Sentence)をそれぞれ表わす。)

(9) 伝達部と引用部の関係

【直接話法】



【間接話法】



上に示した図のように、直接話法では、報告者は情報伝達という観点から引用部の中の伝達内容に応じて伝達部を構成している。このように、領域が異なるために、報告者領域での報告者の視点と話し手領域での話し手の視点を維持しながら、報告者は伝達部での伝達動詞の選択や伝達部の位置を自由に操作することができる。一方、間接話法では、視点が報告者だけにあるので、話し手領域は現れず、報告者の視点から事象を報告しているだけになる。このように、「視点」と「領域」の2つの概念を導入することによって両話法の違いというものを明らかにすることができる。

2. 伝達動詞と引用部の関係

このセクションでは、報告者領域で使用される伝達動詞と話し手領域で使用される引用部との関係を実際のテキストから例を用いて分析してみる。談話の流れから、報告者はどのように伝達動詞を選択し、用いているのだろうか。

2.1. 「要求する」という伝達動詞と引用部の言語行為から

特に本稿では、話法における引用部の中での「質問」という言語行為に注目し、それを伝える伝達部での伝達動詞 demand, press の2つを取り上げる。これらの伝達動詞を比較して、どのような状況でこれらの伝達動詞の使い分けができるのかということを考えてみたい。以下にあげた例文は、N. H. Kleinbaum の *Dead Poets Society* と P. Cornwell の *Point of Origin* からの引用文である(下線筆者)。ここでの分析は、単なる一文単位の分析ではない。話し手と聞き手の談話の中での相互作用⁷において、それを拡大して考えている。(10), (11)は、press の例で、(12)は、demand の例である。

(10) 《場面》授業の後、生徒たちがキーティング先生に自分たちの興味のある Dead Poets Society について知りたいと思い、ニールが中心となって先生に尋ねている。

“Mr. Keating?” Neil called after him. “Sir? O Captain! My captain?” Keating stopped and waited for the boys to catch up with him. “What was the Dead Poets Society, sir?” Neil asked. For a spilt second, Keating’s face reddened. “I was just looking in an old annual,” Neil explained, “and...”

“Nothing wrong with research,” Keating said, regaining his composure.

The boys waited for him to say more. “But what was it?” Neil pressed.

Keating looked around to make sure that no one was watching. “A secret

organization," he almost whispered.

(*Dead Poets Society* p. 46)

ここで、注目しなければならないのが、Neil と Mr. Keating の 2 人の間に見られるやり取りである。このパラグラフの 2 行目で伝達動詞 ask が使われ、“What was the Dead Poets Society, sir?” Neil asked. とニールが一度質問している。それでも答えてくれないキーティング先生に対して、繰り返し答えを求めて 2 度目の質問をしている (“But what was it?” Neil pressed). すなわち、この場面では、何としてでもこの Dead Poet Society について聞き出そうとするニールの態度を報告者がとらえて press を使ったものと考えられる。ここでは、最初の質問と後の質問との間に答えを求めるニールの態度の違いや真剣さの違いがはっきりと現れており、それを報告者 (= 語り手) が読み取って報告している。(11) の例においても同様のことが言える。

- (11) 《場面》ニールは、父親の許可をもらわずに自分の意志で芝居のオーディションを受けようとしている。そこでルームメイトのトッドとその受験についてやりとりをしている。

“And now he will?” Todd asked, raising his eyebrow. (引用部の中の he はニール父をさす。)

“Hell, no, but that’s not the point. The point is that for the first time in my whole life I know what I want, and for the first time I’m gonna do it whether my father wants me to or not! Carpe diem, Todd!”

Neil picked up the play and read a couple of lines. He beamed, clenching his fist in the air with joy.

“Neil, how are you gonna be in a play if your father won’t let you?” Todd pressed.

“First I gotta get the part; then I’ll worry about that.”

(*Dead Poets Society* p. 64)

(10),(11) の例からもわかるように、伝達動詞 press は、後でも述べるが、話し手の質問に対する強さの度合いというものと関係している。それは、その話し手の態度を読み取っている報告者の視点が現れているということである。さらに語用論的に考えてみると、この press は、その質問をする側 (= 話し手) とされる側 (= 聞き手) の態度の違いを明らかに

している。つまり、その質問に答えたくない聞き手の態度とどうしても圧力を加えて聞き出そうとする話し手の態度である。

次に demand の例について考えてみる。

(12) 《場面》 仲間たちは、いつものように Dead Poets Society に集まっていた。チャーリーが Dead Poets Society という署名入りで学校を共学すべしという記事を学校に提出したことを告白した。それに対して仲間がチャーリーのとった行動に対して非難している。そこでチャーリーは次のように要求した。

“Are we just playing around out here or do we mean what we say? If all we do is come and read a bunch of poems to each other, what the hell are we doing?” Charlie demanded.

“You still shouldn’t have done it,” Neil said, pacing around the cave.

(*Dead Poets Society* p. 95)

話し手チャーリーは、引用符でくくられた発話の1度目の質問である Are we just playing around out here or do we mean what we say?をし、なおも立て続けに、2度目の質問をしている。この場面では、チャーリーは周りの仲間たちに訴えかけるように自分の質問に対する答えを強く求めている。伝達動詞 demand を使う場合、報告者は、強い意志を表現しながら聞き手に対する強引な態度をとろうとする話し手（チャーリー）の態度を読み取っている。

これら3つの例でもわかるように、報告者は、各々の発話を単なる質問として捉えているのではなく、話し手の答えを要求する真剣さ、もしくはその姿勢をとらえて描写している。以下にも press と demand の伝達動詞の例をあげておく。

(13) Todd turned angrily. “Listen, Neil, I appreciate your interest in me but I’m not like you,” he insisted. “When you say things, people pay attention. People follow you. I’m not like that!”

“Why not? Don’t you think you could be?” Neil pressed.

“No!” Todd shouted.

(*Dead Poets Society* p. 65)

(14) “Well, hell, no, Charlie, but that’s not the point. That’s not the point at

all!"

"What's the point?" Charlie pressed.

"The point is she was thinking about me!"

"Ah." Charlie shook his head.

(*Dead Poets Society* p. 80)

(15) "We've got to find Lucy," I said.

"What's going on?"

She began to carefully escort me out.

"Where is she?" I demanded.

(*Point of Origin* p.272)

(16) "You're not in a position to be objective."

"And what would you do if you were me?" I demanded. "Would you go home and do nothing?"

"But I'm not you."

"Answer me," I said.

(*Point of Origin* p.287)

2.2. 伝達動詞と引用部の分析の拡張

例にあげた伝達動詞 *press*, *demand* と引用部の関係を話し手領域と報告者領域の2つの領域から詳しく分析してみたい。

まず、話し手領域にある引用部の中での発話を考えると、いずれも疑問文の形式になり、話し手の視点からみると発語内行為の種類は「質問」になる。話し手はその情報を求めていると考えられる。この発語内行為については、以下の引用(Searle (1969: 66))にある通りになる。

(17) 発語内行為の種類

質問 (Questions)

命題内容規則 任意の命題または命題関数

事前規則 1 Sは「答え」を知らない。すなわち、その命題が真であるか否か、あるいは、命題関数の場合には、補充してその命題を真にするために必要な情報を知らない。

2 その時点で尋ねられなくとも H がその情報を与えるということは、S

と H にとって自明ではない。

誠実性規則 S はその情報を求めている。

本質規則 H からこの情報を誘発するという試みとして見なされる。

(Searle 1969: 66)

話し手領域において、話し手は「質問する」という行為を行ったことを引用部は示しているのである。

次に、報告者領域で用いられた伝達動詞について考えてみる。上に紹介した例文では、両方の伝達動詞 *press*, *demand* もともとの意味は、「要求する」である。何を要求して話し手は言ったのかというと、これらの例では、その発話でなされている質問に対する答えを要求していることになる⁸。引用部の伝達内容と談話の流れ（話し手と聞き手の相互作用）から考えると、報告者は、単なる質問としてとらえていない。18a と 18b とでは、話し手の質問するという行為に対して、その態度をうまく読み取っているように思える。

(18) a. "But what was it?" Neil asked.

b. "But what was it?" Neil pressed.

このペアについて明らかに違いが見られる。発語内の力が 18a では質問になり、18b ではそれが要求となる。この発語内の力について詳しく見てみると、Vanderveken(1990: 105-121)は、この発語内の力の概念分析について、以下の 6 つの構成要素を提唱している⁹。

(19) 発語内の力の構成要素

(i) 発語内目的

(ii) 発語内目的の達成の様式

(iii) 命題内容条件

(iv) 予備条件

(v) 誠実条件

(vi) 強さの度合い

Vanderveken . (1990: 105-121)

例にあげた報告者の用いる伝達動詞は、特に(vi)の強さの度合いと関係してくるものである。つまり、質問する度合いが強ければ強いほど、その行為を報告者は「要求する」とと

らえたのである。これは、話し手の側に心理的に大きく関わって報告しているものであると考えられる。例にあげた2つの伝達動詞 *press*, *demand* について、*press* は、その質問に聞き手が答えたくないのに、話し手が必要以上にその答えがほしいとせまる時に、一方で *demand* は、何としても聞き出そうとする話し手の意志を表現しながら聞き手にその答えを求める時に、というふうに使い分けられている。

発話だけをみれば、確かに Searle のいう誠実性の規則「Sはその情報を求めている。」だけで足りるのだから、話法の伝達動詞との関係から考えてみれば、Vanderveken のいう強さの度合いというものを考慮しなくては、説明できない。報告者は、発話を描写する時に、話し手が答えを求めている度合いの違い、話し手の真剣さや質問する姿勢の違い、例えば、「しつこくせまる」、「繰り返し尋ねる」とか「強引に求める」と言ったものを考慮して報告している¹⁰。それによって、報告者は引用部との伝達内容の関係をこれらの伝達動詞を用いて報告している。

これらの伝達動詞の例は、同じ意味の伝達機能 (say+「要求」) を担っているが、それぞれ報告者の文脈からの判断によって違いが見られる。つまり、同じ「質問する」という行為ではあるが、状況から報告者のとらえかたによって使われ方が異なっていることがわかる。

3. まとめと今後の課題

話法の伝達動詞と引用部の関係を言語行為と視点という観点から考察してきた。それぞれの話法における視点の違いを明確にし、新たに「領域 (報告者領域と話し手領域)」という概念を用い、話法の構造の違いについて説明した。直接話法では、場面において報告者領域と話し手領域の2つからなるとらえ方がある。つまり、報告者視点と話し手視点とがあり、それぞれの領域を支配している。その2つの領域が異なるために、報告者は伝達部を引用部とのかかわりあいを保ちながら、適切な伝達動詞を選択し、描写している¹¹。一方間接話法は、報告者の視点による報告者領域だけからなることを比較して述べた。

さらに、2つの領域を設定することによって、発語内の力を表す伝達動詞についても、その選択の違いを説明することができた。さらに、話し手の発話を引用する話法の観点から考えると、報告者の話し手の発話に対する強さの度合いといったものを考慮して考えなければ、様々な発語内の力を表す伝達動詞を説明することができないこともわかった。今後は、言語行為に基づいた様々な伝達動詞の分類や、今回は主に直接話法の伝達動詞に留まったが、間接話法との関連についても考えていかなければならない。

注

*本稿は、1999年12月4日に立命館大学において行われた第2回語用論学会での口頭発表を加筆・修正したものである。当日、有益なコメントをいただいた会場の方々には心からお礼を申し上げたい。特に、澤田治美先生には、この論文執筆について全般的なご指導をいただいたことを深く感謝したい。

- ¹ 本稿では、直接話法と間接話法について取り扱う。話法には自由間接話法というものもあるが、それについては今回は取り扱わないことにする。
- ² 話法における視点の言及には、Banfield (1982), 松村 (1996), 岡本 (1999), 高原 (1983) がある。松村 (1996: 13) には、話法の視点について詳しく言及している。
- ³ 直接話法と間接話法の定義については、以下の文献にも同じような記述がみられる (Banfield 1982, Declerck 1991, Inoue 1985, 井上 1988, 岡田 1982, Quirk *et al.* 1985, Swan 1995⁴, 高原 1983, Thomson & Martinet 1986⁴, 内田 1979, Uchida 1980, Wierrzbicka 1974)。参考までに、Leech & Short (1981:318-334) では、さらに細かく話法を以下の5種類に分けている。

(Leech & Short による話法の分類)

He said, "I'll come back here to see you again tomorrow."
[DS(=Direct Speech) 直接話法]

He said that he would return there to see her the following day.
[IS(=Indirect Speech) 間接話法]

I'll come back here to see you again tomorrow.
[FDS(=Free Direct Speech) 自由直接話法]

He would return there to see her again tomorrow.
[FIS(=Free Indirect Speech) 自由間接話法]

He promised to visit her again.
[NRSA(=Narrative Report of Speech Acts) 言語行為の語りの報告]

Leech & Short (1981) では、このように話法を5つに分類している。しかし、留意しなければならないことは、本稿では、Leech & Short (1981) のいう NRSA(=Narrative Report of Speech Acts) は、間接話法の枠組みの中でとらえることにする。

- ⁴ 但し、文学作品などで、談話の流れの中で伝達部がわかる時はよく省略されることがある。
- ⁵ 「視点」についてのその他の言語学的研究は、毛利 1980, Kuno 1987, 田窪 (編) 1997などを参照。
- ⁶ Langacker (1991: 256) の言う "ground" という概念と等しい。
- ⁷ 澤田 (2000) では、先行する文と問題になっている文との関係において「相互作用モデル」というものを提唱している。

相互作用モデル

文 A
|
文 B

- ⁸ 引用部が命令文の場合では、発語内行為は「命令」となる。その命令の中での要求は聞き手の未来の行為になる。
- ⁹ Vanderveken (1990: 105) は、発語内の力は、その効力をもつ全ての発話行為の成功条件と充足条件を決定する役割を担っていると主張している。また、Alston (2000: 307) は、以下の引用のように、Vanderveken の概念と似ていると述べている。

Vanderveken's overall conception of sentence meaning is similar to mine: "...the meaning of an elementary sentence in a semantic interpretation will be that function which gives as value for each possible context of utterance, the elementary speech act which consists of the illocutionary force and the prepositional content expressed respectively in that context by the marker and the clause of that sentence" (47). Thus he takes sentence meaning to be illocutionary act potential. The difference at this point is that whereas I identify each sentence meaning with a single illocutionary act type, often very generic, which then gets realized in many more specific forms, Vanderveken identifies the meaning with a function from utterance contexts to maximally specific illocutionary act types. There is a simple translation from one of these formulations to the other.
Alston (2000: 307)

- ¹⁰ Grice (1975) のいう様態の格率 (The maxim of manner) とも関係しているように思える。また、伝達動詞には、報告者の視点が反映されているといえる。
- ¹¹ 伝達動詞だけが、発話を修飾しているとは限らない。報告者領域では、副詞やその他の修飾語句との共起も考えられる。

"What are you doing?" Tom said *angrily*.

"This is so strange!" Jane said, sounding confused.

参考文献

- Alston, J. W. 2000. *Illocutionary Acts & Sentence meaning*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Banfield, A. 1982. *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*. Boston, Mass.: Routledge & Kegan Paul.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Grice, H. P. 1975. "Logic and conversation." In Peter Cole & Jerry Morgan ed. *Syntax and Semantics, 3: Speech Acts*, 41-58 New York: Academic Press.
- Inoue, Y. 1985. "Discourse-Orientedness of Direct Speech and Coherence of Direct Quotes," *Studies in English Linguistic & Literature* 2, 61-68.
- 井上 永幸. 1986. 「直接話法伝達部の意味と機能」. 『白馬夏季言語学論文集』. 創刊号. (白馬夏季言語学会) : 17-30.
- . 1988. 「挿入節としての直接話法の伝達部」. 『現代の言語研究』. (六甲英語研究会) 金星堂, 274-86.
- Kuno, S. 1987. *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.2: Descriptive Applications*. Stanford: Stanford University Press.
- Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mey, J. L. 1993. *Pragmatics: An Introduction*. Oxford: Blackwell.
- 毛利 可信. 1980. 『英語の語用論』 東京: 大修館書店.
- 岡田 伸夫. 1982. 「直接話法と間接話法」. 『京都教育大学紀要』. Ser. A, No. 60, 173 - 192.
- 岡本 芳和. 1999. 「話法の伝達動詞と引用部の関係 - 語用論的アプローチ-」. 『日本語用論学会 第2回(1999年度)大会 PROGRAMS & ABSTRACTS』. 7-12.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 澤田 治美. 1993. 『視点と主観性』. 東京: ひつじ書房.
- . 2000. 「二つの NEED (上・下)」. 『英語青年』. 146 巻, 1~2 号, 45-49, 88-91.
- Searle, J. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 1977. "A classification of illocutionary acts." In Andy Rogers, Bob Wall and John P.

- Murphy ed. *Proceeding of the Texas Conference on performative, Presuppositions, and Implicatures*, 27-45. Washington, DC: Center for Applied Linguistics.
- . 1979. *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. & Vanderveken, D. 1985. *Foundations of illocutionary logic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Swan, M. 1995². *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- 高原 脩. 1983. 「英語話法の語用論的機能」. 『神戸外大論叢』. 第34巻, 第4号, 27 - 54.
- 鷹家 秀史. 1999. 「直接話法伝達部の語順についての考察」. 『英語コーパス研究』 (6号), 67-78.
- 田窪 行則 (編). 1997. 『視点と言語行動』. 東京: くろしお出版.
- Thomson, A. J. & Martinet, A. V. 1986⁴. *A Practical English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- 内田 聖二. 1979. 「直接話法と伝達動詞」. 『語法研究と英語教育』. 創刊号, 22-34. 京都: 山口書店.
- Uchida, S. 1980. 'Direct Quotes and Speech Acts,' In Konishi (ed.) *Gengo-Kenkyu no Shoso [Aspects of Language Studies]*. Tokyo: Kenkyusha, 246-56.
- Vanderveken, D. 1990. *Meaning and Speech Acts Volume 1*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, A. 1974. 'The semantics of direct and indirect speech.' *Papers in Linguistics* 7(3/4), 267-307.
- 山梨 正明. 1986. 『発話行為』. 東京: 大修館書店.